

中国の国家と秘密結社

秘密結社の存在は、中国の歴史を特色づけるものである。またそれが反乱と結びつく例も多い。日本には秘密結社がないのに、なぜ中国に秘密結社が多く存在したのか。中国における秘密結社とは何か。それはなぜ反乱と結びつくのか。国民党や中国共産党と秘密結社の関係はどうなっていたのかについて論じる。

小島晋治

(東京大学
名誉教授)

×小林一美

(神奈川大学外
国語学部教授)

×孫江

(静岡文化芸術大学文
化政策学部助教授)

司会 馬場 毅

(愛知大学現代
中国学部教授)

馬場 今日では先生方、お忙しいところを、私どもの座談会にご参加いただきましてどうもありがとうございます。既にご案内しましたように「中国の国家と秘密結社」というテーマを掲げまして、それぞれ専門の先生にお集まりいただき、これから座談会を開始したいと思います。では、最初に小林先生からお願います。

なぜ中国に秘密結社が多く存在し日本には存在しなかったのか

小林 本日のテーマについて、まず日頃考えていることを簡単に述べたいと思います。

日本人は、一般に中国の国家と秘密社会といえば、すぐ専制国家と秘密結社というように両者を対関係で捉えます。日本には、専制君主と秘密結社の歴史的伝統がないので、中国の国家と社会に非常に異質なものを感じます。戦前から日本

人の多くが、中国という社会はいったいどういう社会なのか大いに関心を持ちましたが、結局最後は、邪教、紅幫、青幫、会党、会道門、馬賊、匪賊といった話になり、こうしたものを研究してきました。私は、一九八〇年代に山口大学の佐々木衛氏（現在、神戸大学）を団長として、古来白蓮教の巣窟のような地域であり、義和団運動の発祥の地である山東省奥地農村を何回かみて廻りました（調査結果は佐々木衛編『近代中国社会と民衆文化』東方書店、一九九二年を参照）。また、中

国清代の秘密結社研究の第一人者である、山東大学の路遙教授の仕事ぶりを拝見したりしたのですが、中国農村社会の無秩序ぶりを見て、秘密結社が蔓延するのにもまたむべなるかな、といった印象をもちました。また、昨年、済南で舉行された「義和団運動一百周年国際学術討論会」で路遙教授の『山東民間秘密教門』（当代中国出版社、二〇〇〇年）を頂戴して読みましたが、改めて日本の農村との大きな違いを感じました。

話は少し飛びますが、中国社会を考えるとヒントになると思われる話をしたいと思います。神奈川県で数年前、「秘密結社について」という座談会を行ない、小島先生も出席されたのですが、ここで基調報告されたシチリアのマフィアに詳しい竹内啓一先生が、マフィアは南イタリアの歴史風土の産物である、シチリアはローマの支配下に始まり、イスラム勢力の下に入り、ノルマン王朝に支配され、キリスト教世界に入り、それから長らくスペイン系王朝に支配された、「ヨーロッパの歴史の中でも、むしろ例外的に、一



…………… 小林一美 [Kobayashi Kazumi]

と、発言されている。

この発言は、この千年間に、遼、西夏、金、元、清と続く征服王朝に、国土の一部分、あるいは全部を支配されてきた、征服王朝支配下の中国社会を考える大きな示唆を与えてくれるように思います。

つまり、シチリアで起こったことが、中国では、始皇帝以来、もっとも大規模により徹底的に、しかも文明の蓄積ができない遊牧騎馬民族の約二千年に及ぶ没入と征服と専制支配によって、より破壊的に起こったのではないのでしょうか。こうして、始皇帝以来の専制主義がより倍増され、民衆は、日本の中世で形成された惣のような、古老を中心に自治的に運営された村落を早くから失ったのではないのでしょうか。民衆は古代の太平道とか、五斗米道とかの宗教的な相互扶助組織をつくり、その伝統の延長線上に、明清時代に秘密結社や邪教が蔓延して行く。これが秘密結社や邪教や会道門といった民衆組織が中国に絶えなかつた主なる原因だと思えます。

次に、こうした民衆組織が時代と共に

貫して征服王朝なんですよ。外来王朝の支配下にあつたために、南イタリアでは、王朝国家を母胎にして、国家とか、国民としてのアイデンティティは形成されようがなかつた。地主とか、貴族階級も、スペインから来た貴族は別にして、ナポリの王朝なんていうものは信じていない。支配者を信用できないから、自らの手で秩序を守る自分達の組織として、マフィアを、南イタリア各地に作り出したとはいえると思います」（『秘密社会と国家』二一頁、勁草書房、一九九五年）

拡大、増殖していく原因について、考えるところを簡単に述べてみたいと思ひます。もちろん中国は、古代、中世、近世へと経済は大変な発展を遂げていきますが、その際、専制主義的体制も明清時代の君主専制主義へと時代を追って発展を遂げていきました。つまり、経済が発展するということは、民衆の生産活動、商業交易活動、交通移動活動がより活発になったということですが、それを管理、抑制、支配、弾圧する専制君主もまたより強固に、より残酷になっていったという事です。こうして国家と社会の間に、和解できない乖離、対立が生まれ、民衆の運動は、時代と共に発展し、拡大し、ついに太平天国、中国同盟会、中国国民党、中国共産党等の時代になったのではないかと思ひます。

では最後に、ではどうして日本にはそうした秘密結社の伝統がないのか。やはり、日本の中世に登場した武士階級は、彼らの領地、領国における惣村的自治組織を破壊しなかつたという、日本における権力と村落民衆の關係のあり方に原因があると思ひます。以前、私は「中華帝國と封建制日本」(中村義「新しい東アジア像の形成」三省堂、一九九五年)という論文を書きました。私は江戸時代からの百姓の子孫であつて、大学時代までは、徳川幕藩体制などというものは、人民に職業の選択、移転の自由を許さない、典型的な身分差別の体制であり、封建制という最も悪しき階級支配、人民抑圧の体制であると確信しており、大いに武士に反感を感じてきました。左翼の学者が「あれはサムライだ」などと人を誉めようものなら、何言つてやがる、などと大いに怒つたものです。このように長い間、武士に反感を感じてきましたが、しかしどうも考えてみると、私の郷里はたつた三万石しかない旧諏訪藩に属する、下下田しかない貧しい山村でしたが、武士にいいめられたという話は全くないし、明治維新で諏訪藩が倒れたからといって、武士に復讐をしたといった話もない。三百年近くも武士が悪さをしてきたのなら、城を焼いたり、少なくとも武士の一人や二人を殺してもおかしくないのに全くそ

うした事実はない。むしろ高島城を大切に想い、また藩校を郷里の学生の寮として東京に再建維持したのです。こうしたことは全国的な傾向のように思えます。私の村は新田開発でできましたが、新田を武士が所有したということはないし、全国的に武士が地主になったり、大商人になったり、あるいは両替商になったという話もききません。こうしたことを考えると、武士身分というものが窮屈なものです。藩主は困つたからといって領地を切り売りすることもできません。最後には武士階級は大変経済的に困つて、年貢の取り立てを強化したり、商人から金を借りたりして没落していくわけです。こうした中国の国家、社会との違い、つまり封建制度の有無の問題から、日中両国の社会の違いを考えるべきではないでしょうか。初めから大問題を出してすみませんが、「中国の国家と秘密結社」という時の私の関心を述べてみました。

て、長く皇帝専制主義が続くという、国家や社会のあり方の違いから秘密結社が存続する中国と、江戸時代はまったくそういう類のものはない日本、というお話があつたわけですが、それでは小島先生。小島 僕も考えているのは、なぜ日本と比べて中国には秘密結社があれほど広がつたのかということです。「秘密結社」という言葉自体は二〇世紀の言葉で、せいぜい孫文が使い出したのが初めてぐらいで、そういう言葉は元来中国にはない。あつたのは教匪とか会匪とかそういう言葉だつた。ではそれはいつぐらいから出てきたのか、先ほど小林さんが言つた五斗米道は、当時はまだ教匪という言い方はしてないと思うが、ただ邪教集団視されていたことは事実だ。しかも毛沢東は人民公社をつくる時に、五斗米道が内部で行なつていた義舎制度について中国の共產主義の源流なので党幹部諸君はこれをよく読めと、後漢書のこれについての記述を配布している。これを読んで、意外に中国人にとってはあの時代は近いんだなと思つた。

それにしても、その後一貫して、宗教的な形で結集して、国家権力から異端視された集団というのがあつた。しかし、それが大きく広がつてきたのは元末の時代、白蓮教の弥勒下生信仰からでしょう。彼らは弥勒と宋の皇帝の後裔たるものを担ぎ出す。清代の嘉慶白蓮教反乱の時期にも白蓮教がものすごく広がって、同じく弥勒が下生して、また、明の末裔を担ぎ出す。これは異民族的な王朝が前提となつてそういうものが出てくるのだと思う。一八世紀の後半以降になると、ものすごく様々の、いわゆる教匪、会匪という形の民間結社が広がつてきて、民国から中華人民共和国まで続いてきた。人民共和成立と同時に大分無くなつたと思つていたが、最近また出てきている。なぜかということをも日本と対比して考えると、小林さんの指摘した日本の封建制度と中国の専制国家の違いの問題は確かに重要だと思ふ。原則として世襲の領地から年貢収入に依存する幕藩体制の領主（大名・武士）の支配する幕藩体制と、非世襲で在地に根を持たぬ官僚支配

を土台とする中国の体制の違いが重要だと思ふ。中国社会は日本社会と比べると、ものすごい流動性をもつた社会だ。これには階層的な流動性がひとつある。特に危機の時代にそれが非常に出てくる。そうすると食えなくなつた人達が否でも応でも外に出ていくところから、階層的な流動性の大きさが空間的な流動性の大きさを作り出していく。特に一八世紀後半以降になると非常に広い範囲で流動する。沿海の農村で人口が増加してきて土地が無くなると、山東からは旧満州へとか、福建、広東からは台湾、東南アジアへ、また、東部沿岸から西部内陸地方へと移動していく。

最近の研究では、日本でもかつてよりは、幕藩体制の下でも移動があつたといわれている。しかし、中国と比べたら問題にならない規模だと思ふ。この中国社会の大きな流動性、これは食えないから出てくるのだと思ふ。つまり中国の王朝体制は人民を食わず体制ではない。要するに、民から税金取ればいいわけだ。日本の場合には領地を世襲的に支配してい



小島晋治[Kojima Shinji]

る大名・武士は自分の生活を存続させるには、とにかく民を食わさなくてはならず、民の生活の最低限を保証しなくてはならない。生かさぬように殺さぬようにという、民を殺しては自分たちも生きていけなくなる。中国の体制は税金をとればいいという体制だから、人口が増加したり飢饉が広がったりすれば、殺さぬように保証してくれるものはどこにもない。だから、ものすごい流動性を持つてくる。彼らはどうやって食うかといえば、宗族的共同体というのが中国にはある

が、地縁的共同体というのは日本のと比べるとはるかに弱く、あるか無いか分からないので、彼らは故郷から出ていって、お互い同士で、ある組織をつくって、それで食っていかざるを得ない。

これがいわゆる秘密結社ではないかと思う。つまり、故郷から切り離された無告の民の相互扶助機能をもっていた。

一九世紀半ばの太平天国前後を見ると、アヘン戦争の少し前ぐらいより、華中から華南は反乱が頻発し、その反乱の担い手は、「反清復明」とか、「天に替わって道を行なう」とか、「富者から劫って貧者を濟う」とか、そういうスローガンを掲げた、三合会や、天地会や、三点会などで、後の哥老会になっていく。これらは毛沢東の言う、遊民無産階級を主体とした反乱で、非常に破壊性が大きい。支配層に打撃を与えはするが、民衆の安定的な支持は得られないことが多い。日常は親分の下で相互扶助的な機能を果たしていて、内部は家父長制的な構造をもっていた。つまり解体された家族に代位する疑似家族的な、家父長制的な組織を彼

らは持つている。一方、反乱を起した後、旧社会に代わってどういいう社会を作るかはあまり出てこない。

もう一つ、華中では白蓮教の流れを汲む青蓮教という異端宗教を軸に結合した結社が広がっていた。広東・広西や湖南や湖北についての資料を見ると四川から伝えられたというものが多い。中国社会の流動性が生み出すんだと思うが、華中の山間部の貧しいところから四川等へ出ていって、そこで青蓮教を受け継いで、帰ってくると、広東、広西の非常に広い範囲にこれを広げていく。青蓮教はどこからかというところ、三合会的なものに比べるとより広く農村に広がっているように思われる。しかしこれの反乱と哥老会的なものを必ずしも分離できないところがある。

例えば湖南省の広東に近い宝慶府に新寧県というところがある。一八三〇年代から繰り返し繰り返し暴動が起きていて、その中心になってるのが青蓮教だった。一八三六年、青蓮教の最初の暴動の中心になったのは藍正樽というヤ

才族の武生、つまり科挙試験を受けていて、貧民ではない。それで彼が組織した時には、青蓮教では禁止していた生臭ものを食う奴も入れると宣伝した。ヤオ族だけではなくて、漢族も教徒じゃない者も入れた。彼は、小林さんが現在やっていることにつながるけれども、真命天子だと名乗る。生まれる時に、天上に玉璽が掛かっており、彼が皇帝になることを天から告げられたという夢を母親が見た。また、結婚する時に、女房が二つの龍が天に舞うのを見た。玉璽、龍というのは皇帝のシンボルです。そして反乱を起す時には反乱軍の目印として黄色い布を作った。黄色は皇帝のシンボルです。

それから年号を立てた。こうして多くの人々に彼のカリスマ的な権威を納得させ、二千人ぐらいの人が集ったこの部隊で県城を占領する。この反乱は一旦潰れたが、繰り返し繰り返し青蓮教集団の反乱は続いて起き、この地方からの米の輸出を阻止する闘争は辛亥革命期まで続く。片方の天地会系のものに比べると明らかに農民的な要求に結合しているところ

があつて、かなり持続性がある。華北の場合も、持続的な反乱というのは、こういう宗教的なものを持つている結社によるものじゃないかと思う。

彼らが既存の国家と対立して新しい国家を作る場合、やはり真命天子をもつてこない、反乱の正統性が出てこない。それと結合してはじめて既存の国家に替わる新しい王朝としての正統性をアピールでき、またある程度受け入れられる。

これは現在の中国でも、革命の直後はそう出てないかもしれないが、しかし小林さんの研究によると、かなりあちこち出ている。そもそも中国共産党が政権を取った時、「歴史教学」という雑誌に、農民達が「毛沢東は真命天子だ」と言っている、それとは違ふんだということ。説得しなくてはならない、と出ていた。やはり農民は毛沢東を真命天子だと受け止めたということがあったんだと思う。これは日本では考えられない。日本では、天皇がずっといて、天皇に代わる権威というのは今まで出たことがない。それから大名についても、百姓一揆の中で、

大名に代わって俺こそが真の大名だ、という形で起つというのはいちよつと考えられない。事実それはなかった。中国では、非常に流動性が激しくなってきた場合には、極端に言えば誰でも真命天子を名乗られて、全部が受け入れられるわけではないけれども、ある状況の下ではそれが受け入れられて、新しい王朝を樹立する可能性があつた。

青蓮教の場合はどうやら氣功をやつていたと思われる。氣を運うらせて功に坐す。「運氣坐功」いうのを彼らは修練している、明らかにこれは氣功だと思ふ。そうすると今の法輪功と一脈通じているという感じを持つ。青蓮教でも病を治すこと、病を退けて福を実現することが信仰の功徳だった。だから、もし法輪功のリーダーが「俺は真命天子だ」ということを名乗つて受け入れられたら、これは文字通りかつての秘密結社と同じものになる。中国共産党が非常にそれを恐れるのは、そういう歴史をよく知っているからだと思ふ。

馬場 いま小島先生からは、特に日本社

会と比べて、中国の社会は大変流動性に富んでいるということ、それは食えないから流動するということと、中国の社会は宗族の共同体ということをおっしゃいましたけど、それを基にして疑似家族的という、これはいわゆる異姓結拜をした組織、それが秘密結社、特に天地会、哥老会等であるという指摘がありました。それから日本とは異なる真命天子という問題ですね。これは確かに日本にはない。また華中、華南の例として、三合会あるいは天地会と、宗教的色彩を持っている青蓮教を比較され、その上で青蓮教が気功を使っていたというお話があったわけですが。

孫江先生、どうですか。以上の発言を踏まえた上で、自分のフィールドで発言して頂けたらと思います。

孫 三人の先生方と中国秘密結社についてお話することができます、大変光栄です。まず、小島先生の話について、私なりの理解を述べさせていただきたいです。歴史的に見れば、必ずしも日本と中国がまったく別の世界のような存在ではない

と思います。いわゆる民衆宗教に限って言えば、近代日本の民衆宗教の歴史において大本教は極めて重要な位置を占めています。大本教の教義のなかに、もちろん「真命天子」の意識はありませんが、教祖出口王仁三郎は世直しの思想的根拠を神道の信仰に求め、現実の社会を改革させようとした。中国社会は、なぜ変動が繰り返されたか、これは非常に大きなテーマですから、ここで論じるのは不可能ですが、「真命天子」から捉えるのも一つの方法です。

秘密結社という用語の使われ方

今日のテーマは中国の秘密結社です。「秘密結社」を文字通り解釈すれば、その内部の構成やしきたりを外部に知られていない組織のことです。一般に歴史上の反乱もしくは革命の行動を起すものはみな秘密結社だと理解されるが、社会が比較的安定した時期において秘密結社が皇帝専制体制と共存することについてはどう説明すべきか。秘密結社を反社会、反体制と一括りして中国社会を考える際

に、ちよつとおかしい結論が出てくるんじゃないか。つまり、中国社会自体も秘密結社になってしまいますね(笑)。

だから、八〇年代半ば、僕は南京大学の蔡少卿先生の下で秘密結社の歴史を勉強し始めた時、秘密結社という用語に非常に違和感を覚えました。秘密結社という存在については、結社自身が創つた歴史もあれば、他者によって創られた歴史もあります。これまでの十年間、私は秘密結社関係の資料を分析する際、いつも頭を悩ませたのは資料の信憑性の問題です。テキストに描かれた秘密結社は必ずしもその実態と一致するとは言えません。ですから、秘密結社を考える前に、まず秘密結社という用語の歴史を整理する必要があります。と思います。

最初に秘密結社という語を使ったのは一九世紀のヨーロッパ人です。一七九九年、イギリス領ベナン (Benang) 植民地当局は初めて「天地会」の名を知りました。その後、宣教師や植民地当局は現地の華人社会に存在する天地会に注目し、研究を行ないました。ミルン (Dr. Milne)

は東南アジア華人の三合会を対象に調査しました。ミルンは一八二二年に死去しましたが、その調査結果は一八二六年にモリソンによって公表されました。これは秘密結社に関する最初の研究と見られます。著者はこの論文のなかで「secret association」という言葉を使用し、三合会の名称、趣旨、組織構成、儀式、暗号などを紹介し、三合会とヨーロッパのフリーメイソン (Freemason) との比較も試みました。三合会の性格について、ミルンは、三合会を反社会的犯罪組織、およびメンバーの相互扶助、共同防衛を目標とした組織として位置づけています。このような秘密結社のイメージは後に秘密結社に関する欧文研究に次第に定着していきます。要するに、欧文著作に現れた「secret society」は、中国人の義兄弟結社、および宗教結社を指すものであり、これらの結社はヨーロッパ史上のフリーメソン (Freemasons)、カルボナリ (carbonari) のような秘密団体とともに異端としてのイメージを与えられているのです。実際に、欧米の研究者たちは、しばしば「secret



..... 孫江 [Sun Jiang]

society」という語を犯罪、叛乱と関連させ、「反体制的・反社会的組織」として使用してきました。秘密結社のこのような政治像の定着は、戦後ヨーロッパ、アメリカの中国研究にも影響を及ぼしています。

一九世紀後半、日本人は上述の「secret society」の意味で「秘密結社」という語を使うようになりました。すでに述べたように、ヨーロッパの宣教師たちは植民地支配を背景に、海外華人の秘密結社組織に興味を持つようになりました。これ

と違って、日本人——一八七〇年代以降日本の陸軍参謀部、海軍、外務省によって中国大陸に派遣された人々——は、まず中国の秘密結社を対象に調査活動を行ないました。そのうち、宗方小太郎、宮崎滔天、平山周などは、清末の革命党（興中会や中国同盟会など）との関わりを通じて秘密結社と関わっていました。明治期に中国を訪れた日本人は、一般には清朝の官文書の用語を援用して、天地会、三合会、哥老会、白蓮教を「会匪」「会党」「教匪」と称し、これらを共通に秘密結社と呼びます。一九〇三年、平山は「まこと生」の筆名で「哥老会」と題した文章を『黒龍』に発表し、哥老会を「秘密会」と称し、秘密会が漢代に溯る反体制の民間結社であると指摘しました。この文章は日本人が書いた哥老会に関する最初の文章と見られます。平山が一九一一年に出版した『支那革命党及秘密結社』のなかでは、哥老会は三合会と同様に「反清復明」の組織であると指摘しています。平山は直接に清末革命党の秘密結社動員工作に加わりました。そのため、彼は

秘密結社内部の「反清復明」の内部文書などに接することができたのです。彼は会党と秘密宗教を含む秘密結社を反体制的な民間組織と見なしていたのです。

中国の秘密結社に対する明治期日本人の認識では、彼らが中国の政治的、社会的現状を変えようとする主観的なねらいが、多かれ少なかれ、彼らの秘密結社認識に影を落としました。民国時期に入ってから、日本人は秘密結社という言葉で頻繁に使うようになりました。中国の秘密結社に関する日本人の書物も大量に出版されました。そこに書かれた秘密結社はほとんど「反社会」「反体制」的なものです。

次に、英語の *secret society*、日本語の「秘密結社」に対応する中国語の「秘密社会」という言葉についてですが、中国語の「秘密社会」という言葉の初出は英文、日本文より定期的に遅いものです。そのため、欧米の研究者の間では、中国語の「秘密社会」という語は日本から逆輸入されたものであるという説があります。私の知る限り、最初に「秘密社会」

という語を使った中国人は欧栗甲です。

彼は一九〇一年に発表した「新広東」という書物のなかで、反体制的な義兄弟結社や宗教結社を「秘密社会」、「私会」と称しています。そして、一九〇五年、孫文が海外華僑の結社致公堂の改組に際して起草した「致公堂新章要義」のなかに、「秘密社会因之日盛」という文句があります。一九一二年、平山周の『支那革命党及秘密結社』が中国語に訳され、「中国秘密社会史」と題して商務印書館から刊行されました。以後、「秘密社会」という言葉は次第に広がり、現代中国語として定着していきます。

要するに、中国の秘密結社に関する研究は政治学の次元で行なわれたものが多数を占めます。そのため、異なった内部構成、目的、日常的な状態をもつ組織が「秘密結社」という共通の装置に詰め込まれ、本来秘密結社がもつ多様な政治像は単一化されてしまうのです。最近、アメリカの一部の社会人類学者の間に、白蓮教に代表される宗教結社、天地会のような義兄弟結社を「秘密結社」から「救出」

しようとする動きが出ています。

いうまでもなく、いわゆる秘密結社のうち、「反社会」「反体制」的なものが存在しています。しかし、だからといって、「秘密結社全般を」「反社会」「反体制」的組織であると決めつけることは適切ではないと思います。

秘密結社と反乱の関係

馬場 ちよつと最初の方がわからなかったのですが、大本教の世直しの思想というのが、白蓮教と似てるとおっしゃりたいのでしょうか。

孫 単純に比較するのは難しいです。民間結社は世直しとか乱を起す時に、必ず正統・主流思想から養分を吸収し言説を作るんです。

小島 日本でも、一九世紀の初めから半ばにかけて、幕藩体制が揺らいでくる時に、多くの新しい宗教ができる。如来教とか、黒住教、それから天理教、金光教、丸山教。僕はこの間、金光教の本山に行ってきたが、これらはみな世直しの要素を持っていた。しかし、日本の場合のこ

れらは反乱と結び付いたものは一つもない。大体、日常的な職業倫理、正直であれとか、勤勉であれとか、そういうものが中心なんですね。

それで、中国の民間宗教だつて、全部が反乱と結び付くわけではない。この間、農村・農民を描いた作家として有名な『趙樹理伝』を読んで驚いたのは、趙樹理のお兄さんも親父も、秀才生員だけど、皆あの辺の宗教の結社に入っているんですね。ごく普通の、ほとんどの人がそれに入っている。だから、華北では、そういう宗教教団というのはごくごく日常的なものだったということがよくわかりました。

孫 そうですね。

小島 それが反乱と結びつくのは、これはまた日本でそれが反乱とくっつかない根本的な原因と思われるのだが、末劫思想という劫の思想ですね。日本は終末的な意識があまりない。中国の白蓮教の教典を見ると、末劫の時期に際会すると、太陽は真っ黒になって、大洪水が起きて、家族はバラバラになって、人が人を食う

ようになる。白蓮教系の結社に入れば、劫を免れると説いている。上帝会にもある程度あるわけです。洪秀全は、いまこの最暗黒の時期を越えると、光明が来るんだと言っている。実際の布教の中でも、劫が来ると、百姓なんかやっていられなくなり、生きていけなくなるぞと宣伝している。

中国の民間宗教が反乱と結び付くのは、末法思想・末劫思想という終末観と結合する時だと思う。その時に、弥勒下生とか、真命天子が現れる。日本ではそれが無い。日本でも天明の大飢饉でかなりの数の餓死者が出ているが、総じて言えば日本の社会は一八世紀末以後の中国に比べれば、とにかく最低限の暮らしはなんとかやっていける社会だったんじゃないか、幕藩の時代と中国社会の過酷さと比べるとそう言えると思う。それが終末観である末法思想が日本に広がらなかった理由ではなからうか。この間亡くなった神奈川大学の宮田登さんの『弥勒の研究』を見ると、日本の場合の「弥勒の世」とは「豊作の世」を言うんだとい

う。中国のそれとは違うんですね。そこが中国社会と日本社会の違いだということを感じました。

孫 社会面においては、確かに先生がおっしゃった通りです。しかし、宗教思想の類似性から考えると、日本にも中国に類似した「末法」のような考えが存在しています。

小島 少しあるね。

孫 かなりあるんですよ。また彼らが求めるのは、もちろん開かれた社会ではなくて、復古的な社会です。前に存在している、いわゆる理想化された良い社会を求めたんですね。類似するところはかなりあります。だから二〇世紀に入ると、大本教と中国の紅卍会は、連係しているようなことをやりました。

小島 だから日本ではいろいろな新宗教の中で大本教が一番弾圧された。大本教は戦争中、ほとんど非法化されたんじゃないかな。

民衆思想における日中の違い

小林 中国では、古代から真命天子によ

る「帝王革命幻想」といった、一種のユートピア思想が終末観と共に生まれ、その後二〇世紀まで民衆の変革運動の中核的位置を占めてきましたが、日本の民衆思想の歴史とはかなり異なっている。中国では、様々な世界宗教や道教、あるいは迷信・呪術が重層化して、折り重なって民衆の中に伝わってきたように思いますが、日本では縄文時代のアニミズム的な世界に、一挙に、また圧倒的な力で高度の教義を持つ仏教がのしかかり、日本の古代国家を占領してしまつた。これが鎮護国家仏教ですが、鎌倉時代を中心とした中世時代に終末観が深まり、法然、親鸞、一遍、日蓮、栄西、道元などにより仏教革命が起こされ、以後今日に至るまで、こうした中世仏教が民衆の心を捉えてきました。しかし為政者の方は仏教ではなく、儒学の朱子学を体制側の教義として政治の論理をつくり、また義・礼・忠を人倫の核心思想としました。為政者と民衆は、中国のように直接対峙・對抗せず、日本では、上部構造はいわば二重構造的に分かれていました。中国では真

命天子革命の主役になる「妖人、妖賊」と呼ばれる人々が、古来天下を争うのですが、日本ではそのような邪教は発展もできなければ、武士階級の学問である朱子学の合理主義に対抗もできません。鎌倉仏教も、江戸の朱子学も極めて高度に、合理的・体系的に構築されたために、邪教が社会を抱えて大宗教反乱を起こし、また会道門のような民間結社が藩を超えて秘密結社となつて全国に蔓延し隆盛を誇るなど不可能であつたのです。村々にはお寺が作られ、村ごとにその檀家となり、寺は村共同体の中心になりました。もちろん宗教一揆などもありましたが、日本史を一貫して貫いていくような持続性と、全国性を持つことはなく、たいしたことはない。日本の歴史は、中世の時代に中華帝国を中心とする東アジア古代世界から分離し、独自の封建社会への道を歩んでいったように思えるんです。

国家と秘密結社の関係

孫江さんは、何でも秘密結社にするの

には大いに問題があるといい、そしてアメリカの社会人類学者が白蓮教に代表される宗教結社、天地会のような義兄弟結社を「秘密結社」から除外しようとして試みていることを紹介されました。私も、どれが秘密結社なのか、秘密結社の定義、またどこまでをその適応範囲にすべきかいつもとまどいつつ、漠然と「秘密結社」などと言っています。一般に中国の「会・道・門・教・堂」等の民衆組織は、初めは相互扶助、身家防衛的なもので、厳密な意味での反体制、反社会的な秘密革命綱領や秘密入団儀式、規則、処罰規定があるわけではないが、しかし、次第にそうした方向に変化、変質したり、あるいは簡単に分化、分裂、名称変更したり、権力に癒着したりして、自由無碍なところがあつたり、捉えがたいところがある。日本のオウム真理教も、初めは生命と健康を約束する団体、次に政治目的を達成する団体、最後に反社会的、反国家の革命幻想団体へと変質している。日本ではこうした組織は例外的ですが、中国では会道門の中から「真命天子」が続出する。

『新編中国地方志叢書』の「山東省・公安志」によると、一九五四年から八四年の間に、新皇帝を称した人物二一七人を逮捕したという、また「安徽省・公安志」によると建国後、新皇帝を名乗った人物が八十余人に達したという。その他、真命天子は近現代で多く発見できます。ですから、中国の民衆結社を秘密結社であるものとそうでないものとに分けるのではなく、このように変化したか、全体的にこのような特徴があるのかどうしてかというように考えたい。

簡単に、私の結論を述べておきましょう。根本原因は、一般の中国民衆組織のその本質は、二千年存続し、時代と共にますます強化された中華専制主義の人民に対する対策、支配、管理、弾圧に決定的に規定されていたところにあります。専制主義は、民衆の政治（というより治安）と経済（というより徴税）に対しては極めて粗野な支配を行ないますが、社会・福祉政策はゼロに近く、野蠻にも放置します。また、匪賊でも時には官位を与え、官軍に取り込み利用し、あるいは

また騙して殺します。国家には、一定した理念、一貫した政策というものがないのです。法治ではなく、皇帝・官僚・地主の個々の判断、個々の行為が、つまり人治が全く恣意的に人民の頭上で荒れ狂うのです。それが専制君主というものです。こうした政治の下で民衆は、その時々に応じて、その必要、その対策、その目的のために、文字どおり千変万化して自分なりの「社会」を作って対応せざるを得ない。しかし、歴代の専制王朝は治安対策を徹底的にやりますから、生き残り、持続的に活動できたのは邪教の白蓮教のような、伝統と権威をもつ宗教的な秘密組織だけでした。しかし、清末から民国時代になると、恐ろしい大一統の専制権力はなくなり、帝国主義と軍閥、政党、買辦、土豪劣紳が勝手気ままに人民を収奪し、殺し、支配しようとした。つまり権力が徹底的に分裂し、互いに争い、また各地方も分立し、抗争し、激動の渦に巻き込まれていった。民国時代に民衆の間に、宗教的な組織、秘密結社、反社会的組織、相互扶助的組織、匪賊・馬賊な

どが雨後の筍のごとく生まれ、増殖拡大していったのは、民衆のそれぞれの水準、それぞれの条件に応じた対応だった。そこでは、相互扶助的な組織が秘密結社に変わり、逆に秘密結社が政治権力に身を売り、身家防衛的なものから真命天子が生まれる、そうした状況がやって来たもののように思われます。専制主義の恣意性は、民衆組織の恣意性と対関係になつて、長い歴史を織りなしてきたのではなにかと思います。

これが、中国における「国家と秘密結社」の関係についての、私の概論です。

中華民国期の国家や国民党 あるいは中共と秘密結社

馬場 それではここで中華民国期の問題について議論したいと思しますので、孫江さん、この時期の権力側や国民党、あるいは中共と秘密結社の関係について意見を出して下さい。

孫 一九一二年以降、政権が清朝から中華民国へ移行した後も、清朝の支配体制が直面した政治的課題はなお未解決のまま

ま残されていきました。北京政府初期、袁世凱は数回にわたって秘密結社取締令を頒布した。その内容からみると、秘密結社そのものを禁止するよりも、政治化された秘密結社、あるいは政党によって利用された秘密結社を禁止することがその主眼です。その後、国家の統合と省自治の対立のなか、各省の軍事情権は事実上秘密結社の問題を顧みる余裕がありませんでした。軍閥混戦のなかで、「秘密結社」の問題は清朝時期のそれより一層複雑になりました。義兄弟のスローガンを掲げながら掠奪を行なう土匪・兵匪が勢力を増し、しかも軍閥の軍隊と土匪の關係は一体両面のものでした。それに対抗して、華北地域の紅槍会に代表されるような、秘密宗教を精神的支えとする農村土着の武装勢力が現れました。

共産党と連合して民衆動員を行なった。一九二七年の「四・一二クーデタ」後、支配政党となった国民党と秘密結社との關係が大きく代わりました。それ以前の秘密結社動員と異なつて、国民党は支配体制の建設と維持のため、秘密結社を弾圧もしくは支配体制に組み入れようとする方針を取っていました。

上海の青・紅幫と国民党政權との關係は従来より注目されている問題です。上海の青・紅幫は「四・一二クーデタ」およびその後上海における国民党の支配体制の確立において、重要な役割を果たしました。一九三九年、ある日本人は、「国民党または国民党政府といふものは、青幫と浙江財閥と中央軍との合体であつて、蔣介石と虞洽卿と杜月笙の合辦事業」であると觀察しています。このような觀察は杜月笙に関するM・ブリアンの研究によつて裏証されました。

一方、一九二〇年代の労働運動において、中共は上海の労働組合を通じて労働者に対して大きな影響力を持っています。しかし、一九二七年後、国民党政權



4・12クーデタで捕えられた民衆



上海青幫の親分杜月笙(右端)と張嘯林(左端)

は杜月笙と彼を中心とした青幫勢力を通じて、中共に取って代わって労働者をコントロールしました。E・ペリーによれば、これは一九三〇年代における労働運動消沈の直接的原因でした。一九三七年、杜月笙は国民党政權と共に重慶に撤退しました。青幫のネットワークは日本軍の支配秩序の網目となりました。日本敗戦後、国民党勢力は再び上海に戻りました。三青团に代表された革新勢力は戦前の青幫利用の方針を変えて、労働組合から青幫の勢力を排除しようとした

が、失敗に終わりました。

一九二〇―三〇年代、青幫のネットワークを上海地域における支配体制に組み入れたのと同様に、ほかの地域において、国民党は秘密結社に対して取り締まりを行ないました。しかし、いずれも予期の成果を得られなかった。一九二八年春、国民党政府は「廟産興学」を発端に迷信打破運動を行ないました。やがてそれは国民党のイデオロギーの統一性と社会再編を目的とした政治運動に広がり、一月に発布した「神祠存廢標準」には

秘密宗教結社に関わる内容が含まれています。特に注目されるのは、一九二〇年代に現れた紅槍会は明清時代の白蓮教の流れを受け継ぐ「邪教」と見なされる、という点です。また、国民党政府は民国期に出現した新興宗教結社（一般に慈善結社と称される）に対して、一九二九年五月に禁止令を発布しました。要するに、国民党政權は秘密宗教結社を社会再編と政治統合の妨げと見なしていました。このような姿勢は清朝政府のそれとほとんど同じです。

日中戦争勃発後、国民党政府は四川省の重慶に都を移しました。その前、一九三五年、国民党中央軍は紅軍を追いかけて軍閥支配下の四川に入りました。国民党勢力と軍閥諸勢力との駆け引きを経て成立した四川省政府は、蒋介石駐重慶行營の意思を受けて、秘密結社取締令を発布しました。哥老会、同善社などの秘密結社はその対象となりました。国民党政權は大きな勢力をもつ哥老会に対する取り締まりを通じて、四川地域で社会的統合を成し遂げようとしたのです。しか

し、哥老会禁止令を実行する各級の行政機構や末端の保甲人員のうちには、哥老会メンバーが多数含まれていました。そのため、禁止令は空文になってしまった。

戦後、「憲政運動」が喧伝されるなか、各政治勢力は争って秘密結社を利用しようとし、政治化（政党化）に歯止めをかけるため、「領導幫会与防止幫会組党案」を打ち出しました。一九四六年、国民党政権は「中国新社会建設事業協会」という新しい幫会組織を結成し、幫会結社をそのなかに吸収し、コントロールしようとした。しかし、このことはかえって幫会結社の活動を助長しました。一年後、国民党内部の反対により「中国新社会建設事業協会」は解散されました。

国民党政権のこうした一連の幫会策略と対照的に、山西省を支配した閻錫山は幫会をその支配体制に組み入れることに成功しました。戦後、閻錫山は戦時中設立した「進歩委員会」（青幫）と「民衆山」（紅幫）の二つの幫会組織（閻錫山自らがその中心メンバー）にほかの幫会組

織を組み入れました。この二つの幫会は事実上山西省における閻錫山の支配機構の一部として役割を果たしました。

要するに、国民党政権と秘密結社との関係は、清朝政府と秘密結社との関係に極めて似ているのです。すなわち、イデオロギーの統一性と支配体制の一元性を求めて、法的に秘密結社取り締まりを行ないました。しかし、政治的統合力に限界があるため、事実上秘密結社の存在を容認せざるをえなかった。一方、蔣介石と上海青幫との関係、および戦後閻錫山が山西省で幫会を組織・利用した事例はいずれも予期していた効果を得ました。前者において、青幫のネットワークを通じて、上海地域における国民党政権の支配体制を樹立し、後者の場合、青幫、紅幫を自らの支配体制の一部分として機能させました。

以上の概観からみると、中国の政治体制は伝統的皇帝—官僚制国家から「近代的」国家へと大きく変わったにもかかわらず、支配者と秘密結社との関係は基本的には変わっていない。具体的に、第一に、

清朝政権と国民党政権はいずれもイデオロギーの統一性と一元的支配体制を確立するなか、秘密結社を異端的な存在と見なし、繰り返して秘密結社を弾圧していった。第二に、一元的な支配体制の理念から秘密結社に対する弾圧が求められませんが、現実には、支配者は政治的統合力が不足するため、しばしば秘密結社の存在を容認し、秘密結社を支配体制の一部分として取り入れざるを得ませんでした。

権力側と秘密結社との関係における以上の二つの特徴は、中共と秘密結社との関係にも当てはまります。まず、秘密結社に対する認識において、中共が秘密結社を革命動員の対象として「革命的な存在」と見なされた一時期を除いて、中共は秘密結社を反革命的な存在として位置づけていました。清朝、国民党との政治体制の違いがあつたにもかかわらず、このような秘密結社認識・政策の類似性は、これら三つの政治権力がイデオロギーの統一性を求めることに由来します。

次に、中共の全国的支配体制が確立す

る前に、中共と秘密結社との関係には、中共による秘密結社動員・弾圧の変奏曲が繰り返し演じられていました。それはこの時期における中共のイデオロギー原則と革命の現実との緊張関係——絶えず社会から支持を獲得するために統一戦線を提唱することと、イデオロギーの統一性を維持することとの間の緊張——に由来します。この問題を解決する方法として、秘密結社の《革命／反革命》という一見矛盾する二つの言説、および秘密結社に対する《動員／弾圧》の相反する政策が現れたのです。

ここで注目すべきことは、清朝政権、国民党政権と異なって、中共は社会全体を政治化することによって、イデオロギーの統一性と現実との緊張を解消させた、ということなのです。具体的に、中共は社会変革を通じて従来の社会関係を打破し、革命のイデオロギーを基準に社会を再編成しました。また、政治闘争——暴力による弾圧と大衆動員——を通じて、自らの支配を社会の隅々にまで浸透させ、社会全体を缶詰のような高度に政治

化された社会に統合しました。こうしたなか、秘密結社は法的に否定されただけではなく、社会においても活動の空間を失ってしまったのです。一九五〇年代、清朝政権、国民党政権が求め続けていた一元性的な支配体制が確立されるにつれ、両政権が悩まされた秘密結社の問題も中共によって解決されたのです。

小島 条件によって、体制内の結社でも反乱と結合したり、逆に非常に反体制的な結社が、清朝に、あるいは中華民国に、あるいは旧満洲国なら、満洲国にすっかり取り込まれて体制を支える勢力になっている。そういうことも絶えず起こっているんですよ。

孫 そうそう。だから私は学位論文の中で、秘密結社という概念を中立化しました。まず明確にしたのは、秘密結社という言葉は叙述ですよ。要するに先ほど申し上げたような歴史もあります。他の人によって作られ、語られた歴史もあります。叙述と実体の両面があります。だからこのような視点から秘密結社をもう一度考えると、やはりこのような結社をす

べて「秘密結社」と呼んだら、ちよつと問題があるのではないかと思えます。個別の事例、ケーススタディに関して、ある環境のもとで、小林先生が主張されている「構造的負性」に置かれた人の社会的状況から結社の反乱を考えるのがいいと思えます。

哥老会について

小島 蔡小卿さんから聞いたんですけど、蔡小卿さんは常州出身ですよ、実は蔡小卿さんより上の世代の人は、みな哥老会みたいなものに入っていたんだと。本当にそうなんです、やはり。入っていないと身を守れないから入るんでしょうか。一種の助け合いみたいなのが行なわれるからなのか。あるいはこれは、地域によって違うんでしょうか。

孫 加入していたのはその通りです。

小島 そうなんですか。本当にそんなに日常的に哥老会などに入っていたんでしょうか。

孫 例えば、国民党時代の四川省、国民党と秘密結社との関係を考える時、具体

的には一九三五年からの国民党と四川省の哥老会の関係は非常に複雑です。最初の時期、弾圧しようしました。しかしなかなかできず、結局、日中戦争期の一九三九年頃、重慶国民政府内部の調べで公務員がみな哥老会に入っていたことがわかったのです。これを恐れて、公務員の哥老会参加を禁止するという禁止令を三回にわたって出したんですよ。

小島 戦争中に？

孫 戦争中ですね。

小島 これを見ると(資料を見ながら)、四川の袍哥会という哥老会系の結社には二種類あって、一つは、進士や学生といった上層が入っている、これは「清水」という秘密教団です。もう一つは、社会の下層が入っている。これはつまり土匪で、略奪・人さらいなどをする。親分がいて、きちんと略奪品や身代金を分けていた。結構上層の方にもそれがいくらしいんですね。

孫 清末から既に始まっています。具体的に一九世紀の末頃、このような「清水」と「渾(混)水」の使い分けですね。当

時の四川省の諮議局の議案のなかにも哥老会のことにも触れているものが、二種類あります。たくさんの進士たちが哥老会に参加したとか、このような記事があるんです。

小島 これは辛亥革命期の四川暴動の時ですか。

孫 そうです。辛亥革命と秘密結社の関係を研究する時に、ほとんどの研究者は秘密結社の役割を高く評価しますが、私のみるところによりますと必ずしもそうではありません。

本当に機能しているのは、秘密結社のネットワークです。要するに、秘密結社的な関係を通じて、民衆を動員して、新軍を動員して、革命を起すとか。このような視点から考えたほうがより事実合致するのではないかと思えます。実際に私も毎日、出した論文を反省した上で、このようなものを新しく書いたんですね(一同笑)。

馬場 孫江さん、今、ネットワークとおっしゃいましたが、「武力」という問題ではどうですか。四川などでは非常に哥老会

が動いていますね。革命派が、あるいは立憲派でもいいんですが、武力集団としての秘密結社を動員するという側面はどうですか。

孫 そうですね。あります。武力という側面。例えば、四川の同志軍の蜂起ですね。そして、貴州、典型的な例を挙げれば、四川省、湖南省、貴州省、陝西省、この四省のいわゆる秘密結社は、ある程度の役割を果たしています。特に、四川省と貴州省は両方とも立憲派の人が結社を動員して、巡撫か、省政府を倒したとか、このような動きがあります。

四川省のことについてはいろいろ読みました。自分の研究はありませんが、やはり西川正夫先生が随分前に書いた論文は、今発表されている同類の研究の中で一番素晴らしいものではないかと思えます。哥老会はどういうものなのか、一つひとつの事例を細かく丹念に研究して、四川省の辛亥革命を研究したものです。

それに関する私の研究はまだ発表されていませんが、貴州省はとも面白いですね。貴州省には立憲派の二つの派があ

ります。一つは立憲公会、もう一つは自治会。自治会の方は民衆動員を行なったんですね。いわゆる民衆動員というのは、

実は哥老会の動員ですよ。立憲公会の方は進士たちの集まり。ちよつとタイプが違います。私の考えでは、立憲派は、革命派と同様に直接動員したわけではなく、大体中間組織を作ったんですよ。革命派は浙江省など他の省でも、例えば光復会とか、興中会とか皆そうなんです。要するに、革命派は哥老会と秘密結社を集める場を、まず作り上げて、それを通して動員を行なう。大体このような形ではないかと思えます。

小島 貴州省は、清朝末期、竹内房司さんの、灯花教についての研究がある。青蓮教系のね。これは珍しく、末劫の後の理想社会のイメージをかなり詳しく描いている。貧富が無く、黄道世界、「貴なく賤なく貧なく富なく」という世が実現し、求めるもの一切がお前達の意のままになるといふ。末劫の後の理想社会のあり方が描いてある白蓮教の教典ってほとんどないんですよ。ところが貴州

のこれにだけは書いてある。一種の千年王国的なユートピア主義だと思うんだけど。

中共と秘密結社の関係

次に、中国共産党と秘密結社の関係について、教えていただきたい。

対抗する側面と、吸収し、利用した側面があったように思う。例えば井岡山の王佐、袁文才なんかは毛沢東が吸収するわけですよ。しかしそれは結局弾圧された。中国共産党の中には賀竜もそうだし朱徳もそうだったけど、哥老会的なものに関わっていたリーダーというのは結構いますよね。中国共産党ができてからも、政権を樹立してのちは鎮圧されたけれども、利用しようとした側面はかなりあったのではないのでしょうか。歴史の中で、これは全体として成功したんでしょうか。

馬場 孫江さん、あなたの論文のテーマでしょう。一九二〇年代から五〇年代までについて、簡単に大きな見通しを述べて下さい。

孫 実は今日、論文を持ってきたんです。もうすでに三年前に書いたものですよ。ども。

この論文を通して、三つの問題を研究しました。一つは、中国革命の歴史において秘密結社はどのような位置を占めているのか。二番目は、中共の反革命の言説において秘密結社はどのような位置を占めているのか。一つは中共の言説の中で、決議文とかいろいろありますね。もう一つは、実際の歴史の中でどのような位置を占めているのか。三番目は、秘密結社がどのような生存動機から中共に協力、もしくは対立的な姿勢をとっていたのか。

小島 面白いテーマだね。

馬場 基本的に孫江さんの見解は、中共は、秘密結社を動員すべきという時はするけれども、そうでない時期、共産党の方が動員の対象にしない時期についてはある種敵対的關係ということですね。

小島 馬場さんがやった紅槍会についても、初期には非常に李大釗などが取り組もうとして努力したが、結局駄目だった

んですか。

馬場 最近、それについてまとめたんですが、『中国近代華北民衆と紅槍会』汲古書院、二〇〇一年）、国民革命の時期、中共の政策は、基本的には紅槍会を農民協会の中の農民自衛軍とすることでした。河南省で最も行なったわけですが、実際には動員に成功していないと思います。ただ、後の一九二七年七月のソビエト革命以後になってきますと、中共の方針がひどく極左に振れ、武装暴動になります。そうなると中共は独自の軍がないものですから、逆に紅槍会みたいな既成武装集団を真正面から見据えて武装暴動に動員しようと一生懸命になるんですよ。だから、結果的には動員にそれほど成功しているわけではありませんが、国民革命期に比較すれば動員に成功しています。それは河南でも山東でも言えると思います。

小島 あれはしかし、秘密結社とは言えず、オープンな組織ではないのかね。
馬場 いえ。私は秘密結社と考えています。確かにその存在は、会外の人に知ら

れている。何しろ河南省だけでも最盛期には数百万の会員がいたともいわれているくらいですから、その点では秘密とは言えないかもしれません。当時の軍閥政権に対して表面は連荘会を名乗ることがあります。それは弾圧を避け組織を守るために合法性を装うのだと思います。また組織を体制側に対しては隠蔽するし、また「刀槍不入」になるための習練とか、護符や呪文、入会の儀式等は会員以外の人には知らせない。

小島 まず秘密というのは、誰に対して秘密で、なぜ秘密にするのか。例えば、国家。それから、結社以外の人々に対して、その秘密のシンボルとして独特な暗号、言葉、徽章、印章などを持ち出して、それによって内部的な一体感を強める。だから秘密、秘密と言うけれど、使われ方に必ずしも明確でないところがあって、例えば、拝上帝会は秘密結社なのかどうか、よくわからない。少なくとも初期の宗教運動の段階では、必ずしも秘密主義ではないですね。

孫 とところでこの論文はすでに九十七年に



辛亥革命前の若い頃に哥老会に参加したことがあった朱徳

完成していたもので、その後、国民党の研究に集中しています。こちらはまだ完成していませんが、私の関心は二つあります。一つは農民運動の中の秘密結社と中国共産党の関係。もう一つは、労働運動。

労働運動の中では、共産党が労働者の仲間入りをするために、「拝老頭子」「做小兄弟」という、まず親分への弟子入りをする。そして紅幫のメンバー達と血をすすりあつて盟約を結んで、義兄弟の関係を結んで仲間入りに成功してから、労働運動の中で階級意識を完成させて、労働運動を起したんですね。大体このような形です。しかし、共産党は自らの労働者の組合を作った後に、大抵それまでの秘密結社を無視する。

農民運動は主に二つに分けられます。一つは、革命期に、例えば国民革命時期からソビエト時期、延安時代や日中戦争の時、大体共産党は、最初は結社のネットワークや関係をいろいろ動員して呼び掛けています。特に延安時代は一番面白く、陝西省で哥老会の大会まで開いた。

今までの「反清復明」の精神を受け継いで、日本を打倒しようとする、このような事例が、非常に典型的な例です。ところが根拠地を作り上げた後になると、秘密結社を全部排除してしまう。党内からも根拠地から排除するんですね。

これが一つですね。もう一つは、解放後に弾圧してしまうことについて取り上げました。

馬場 孫江さんが今言われたような、中国共産党はいわゆる近代的労働運動をやるうとした時に、青幫や紅幫のネットワークを使ってやっていたということが、戦後の革命史の中ではまったく消されていくわけですよ。そして青幫、紅幫については、例の「四・一二クーデター」の、あのイメージがずっと続いて、そのため二〇年代の労働運動が始まった時に果たした役割が消されています。また杜月笙のナシヨナリストとしての側面。例えば上海事変の時に、杜月笙配下の青幫は抗日で戦うわけですね。上海で日本軍と戦ってるわけです。もちろん青幫はそれだけで評価すると間違いを起こします

けれども。やはり「四・一二クーデター」でのイメージ、枠組で考えられている側面は非常に残っている。

私は青幫の性格というのは非常に多面的だと思ってるんですが、根本のところには貧者の相互扶助組織という側面があつて、しかし上海を押さえて黒社会を支配している。かつ杜月笙自身も銀行家、まさに大実業家になってるし、それから国民党や国民政府の要人ともなつて、国家の中に入っていきますよね。この国家の中に入っていくということは、つまり権力とくっつくことが、秘密結社の側の自己保身なのか。あるいは国家の方が秘密結社を抱き込もうとしているのか。いずれにしても、このような事態は、私たち日本人から見ると理解しにくいことなんですよ。

小島 杜月笙は、最初の人民政治協商会議に参加しているのではないですか。

馬場 最後には香港にいて、呼び掛けを受けるんですが、参加していません。孫 次男を上海に残しています。

秘密結社間の抗争のあり方

小林 中国で一九八〇年代から全国一斉に編纂、発行されている『新編中国地方志叢書』の「臬志」を見つづけておりますが、その「取締反動会道門」という項目は必ず見ており、それらをまとめて「中華帝国を夢想する叛逆者たち」という論文を最近書きました。「ユートピアへの想像力と運動」(御茶の水書房、二〇〇一年)を見ていただけると分かるのですが、清代から民国時代にかけて会道門と呼ばれる民間宗教結社、秘密結社が多数生まれるのですが、民国時代にそれらが全国的に叢生し、増殖し、拡大する。一つの県に会道門諸派が十や二十も並存することも珍しくない。こうした状況を見ていて、いつも不思議に思うのは、けっして各種会道門の間に対立、抗争、殺し合いが起こった記録がないことです。これら会道門の中から「真命天子」が生まれ、革命を目指すのになぜ殺し合いが起きないのか。大体、革命党派というものは必ず争い、殺しあうものなのですが。そう

いえば、清代に起こった嘉慶派白蓮教の反乱の時も、劉之協の弟子宋之清は師とけんか別れをして別の組織を作りますが、殺し合いはありませんでした。

孫 そうですね、そう言えば。

小林 党派、教派が殺しあうためには、両者が革命に至る理論、方法、段階を精緻にかつ体系的に構築していて、両者に、これ以外道はなく他の党派、教派は誤りであり、それらを打倒することは正義であるという確信がなければなりません。どうも中国の反体制の宗教的・秘密結社的な組織には、キリスト教の正当と異端におけるような、そうした狂信性がないというか、乏しい。極めて世俗的であり、また観念的でない。中国近代の会道門などを見ると、小さな組織の教祖が、俺は真命天子だ、新皇帝だ、女房は皇后だ、息子は皇太子だ、〇〇は將軍だ、というように、初めから権威・権力・富貴を約束している。極めて世俗的であり、神の命ずるままに命を捧げるとか、子供を神の生贄に捧げるといった、自己否定的な救済思想は全くない。ここに中国に於い

ては、秘密結社同士や会道門同士の殺し合いがなかった原因、理由があると思うのです。

小島 中国では拜上帝教だけだね。あれは大変偏狭だね。日本では浄土真宗や日蓮宗が出てきた時に似ているね。中国では趙樹理の家族が皆違う宗派に属しながら仲良く暮らしている。

小林 私は二七歳の時から数年間、創価学会と激しく対立した立正佼成会の高校で教師をしていたことがありまして、両者は激しく対立していた。両者とも、日本の仏教諸派の中では最も戦闘的な日蓮宗です。ましてや中国はこんなに秘密結社があるんだから激しく対立しあってもいいんじゃないかと思うんだけども。孫 これは初めて気がついたことですね。

小林 皆殺しの事件が一つも起こっていないというのね。

孫 『American Historical Review』という雑誌に「千年王国論」など四つの論文が掲載されています。世界中のあちこちの千年王国運動についての研究ですが、僕

は四つの論文を読んだ後、この千年間中国で何が起きたのか、少し考えたんですけども、私の考えでは千年頃という宋代ですね。宋代から明までは、中国の民間宗教の第一時期です。この中で二つの流派が生まれました。一つは白蓮教。もう一つは羅教系です。この二つの宗教は外来宗教と中国の土着宗教の交流の産物です。これは第一期。いわゆる儒仏道の三教合一。実は三教よりもっと多いですね、マニ教なども含まれますから。

第二期は、清末民国初期。五教合一ですね。紅卍会や一貫道がその例です。佐藤公彦先生が一貫道について書かれていますが、私の考えでは、民国時代の一貫道と清朝時代の一貫道は全然別のもので、もちろん自らの歴史を語るとそこに遡るんですが、実際は別個のもので、五教合一を強調したんですね。要するに、いろいろな宗教の思想が共存するのを認めた上で成り立っているものです。先生がさきほどおっしゃった、殺し合いがなぜ無いかという理由はここにあるんじゃないかと思えます。



.....馬場 毅[Baba Takeshi]

もう一つ、例えば、民国時の宗教結社は非常に面白いですね。一人がいくつかの宗教結社に参加するというケースもあります。

馬場 小林さんのお話は大筋として賛成なのですが、細かいことになりませんが、紅槍会の例を採り上げてみたいと思います。ここで使用する紅槍会という言葉は総称で使います。その中に赤い房をつけた槍を持った狭義の紅槍会のほかに、白槍会、黒槍会、黄槍会、紅纓会、扇子会、天門会、大紅学と小紅学等を含みます。

ところで紅槍会同士は結構ぶつかるんですよ。例えば大紅学と小紅学が対立したり、天門会と清道門が対立したりして、殺し合いにまでなっています。ただ紅槍会の教義自体は非常に曖昧なものであり、宗教結社みたいにしつかりしていないので、地盤をめぐる争いなど、そういう日常的な利害の対立で衝突している。けれども先ほど言われたように、教義が違うからではありません。

小林 実際には政治問題、社会問題が関係してくるからね。

孫 宗教問題ではなくて、政争問題。ともあれこのことは初めて考えたことですね(笑)。

反乱の伝承のあり方

小林 真命天子について、先ほど小島先生が言われたことですが、私は二千年前と同じだという感じがするんですけどね。

小島 本当だね(笑)。

小林 大学時代の恩師である木村正雄先生の『中国古代の農民反乱の研究』(東京

大学出版会、一九七九年)をみますと、民衆が新皇帝を宣言して一斉に反乱に立ち上がったのは、後漢時代です。その中には「妖賊」「妖人」といわれる、今

でいうとオウム真理教の麻原某のような人物が多く新皇帝を名乗って続々と出てくるわけです。中国古代史の研究論文を読みますと、漢代に陰陽五行説と天人合一、天人感應説が融合し、宇宙の生成から人の世の展開、個人の禍福、さらには王朝の交代までを必然的な生成・展開論で説明するようになったという。つまり、人間の責任・倫理・信仰といった主体の問題ではなく、世界の自然的推移、展開に身を任せた他力革命論＝易姓革命論が勝利したことが、以後の中国に起こる革命の型と本質を決定したように思えます。

馬場 そのことは伝承していくのですね。小林さんがお書きになった「中国農民戦争史論の再検討」(『明清時代史の基本問題』汲古書院、一九七七年)で述べられているように、正史よりはむしろ様々な伝承により、講談もあるでしょう

し、芝居というところが後になるけれど、様々な形で伝承してきた。そこに中国の大きな特色があるのではないでしょうか。

小林 中国の民衆反乱の指導者は、多くはあまり文字も読めない大衆でしたが、彼らがどうしてあれほどの壮大な大反乱をやり、巨大な権力の体制を作ることができたのか。彼らの教養は文字資料ではなく、口唱伝説、通俗説話、芝居、講談、占いの教養、それらに依るものが大部分だったと思います。だいたいこうしたものは、世俗的な知識だけで、一神教のような観念性に弱い。

孫 でも、これも伝説ですよ。

小林 伝説が威力を持っているんですよ。

孫 中国人の歴史観について、もう一度反省してみたいのは、僕は歴史をよく読みましたが、普通の人は読まないということですよ。だから、歴史の長い河の中に突然一つの波と波の間が繋がってなるわけですよ。中国人の歴史意識は十年ぐらいで、一般の庶民達にとってはそれほど

長くありません。

小島 毛沢東の演説を聞くと、昔の話ばかり出てくるんだよ。人民公社の話をするのの後漢末の五斗米道の話が出てくる。

孫 そうですね。

小島 民の中では、本は読まなくても、三国志や、芝居、映画、伝承などで歴史と繋がっている。

孫 日本の歌舞伎や能は大体室内で行なわれるんですね。中国の京劇などは全部露天ですね。だから音が凄いでしょ。住人以外の遠くの人を、こっちに來い、こっちに來いと呼ぶためにわざとこのような激しい音を出したんですね。

歴史教育について

小島 今、中国の中学校の歴史の教科書を訳していますが、もう膨大な分量です。日本の大学の中国通史よりもはるかに内容は多い。お話が多く、しかも面白く書かれている。とても一冊で終らないから、かなりの厚さで二冊になってしまふ。先生は内容を全部話したらとても時間が足

りないので、中国では、学生がまず自分で読んで来て、そこからまとめて先生が説明するだけなのかね。中学校の歴史授業というのは、どのように進めるのだろうか。

孫 僕の眼から見ると、日本の学生はどうも、暗記する習慣は身に付けていませんね。中国では、育ちが良ければ暗記するしかないんですよ。私の時代は六冊です、ほとんど暗記できるほど覚えましたが、なぜできるのか。小学校に入る前にこのような訓練を受けたからです。三歳ぐらいで千字以上の漢字を読める人も結構います。うちの子供にも『大学』を暗記させたいんですよ。意味は解らないでしようがとりあえず頭に記憶させました。

小島 ヨーロッパでは『聖書』を暗記するんだらう。今はどうか知らないけれど。孫 ユダヤ人もそうですよ。『旧約聖書』にわざと蜂蜜をつけて子どもに舐めさせたいんですよ。あれは甘いでしょう。宝物があると気づかせるのです。

馬場 愛知大学現代中国学部で高校生の

作文コンクールをしています。途中で中国の教育をうけて帰ってきた高校生が、中国語で書いて応募してきたんですが、日本の教科書は南京事件、日中戦争で日本がしたことなどを書いてないというんですよ。私は書いてないというわけじゃないとコメントしました。けれども今のお話のように微に入り細に入りは書いてないので、ある種の記号になってしまっているんですよ。「南京事件」というふうですね。だから、書いてはあるんですが、中国から帰ってきた高校生から見ると、やはりこれは何書いているんだということになると思います。日本の高校生が充分なイメージを持てるだろうかと感じますね。

小島 中国は日本のニューナシヨナリズムの裏表で、愛国主義が前面に出てきていて、戦争のことも、どれくらい殺されたかを詳しく書いています。

孫 中国の社会は今、政治社会です。皆、政治に関心を持っています。歩きながら新聞の政治記事を読んでいる。日本では考えられないことです。

小島 うちの娘は全然選挙なんか行かない(笑)。

小林 日本の教科書が面白くないのは、戦前は天照大神など天皇中心の物語で、戦後は科学的歴史学で構造論になってしまったことがあると思います。

小島 中国のものは物語的で、読んでいて面白い。ただかなり愛国主義が鼻につくこともあるし、秘密結社など出てこないし、少数民族の扱い方が漢族中心の感じがするけれども。

馬場 それでは先生方、今日は長い間、大変興味深いお話をしていただきどうもありがとうございました。

(二〇〇一年三月一日)
(山岸健太郎「テープ起し、馬場毅」文責)

※写真出典——『図片中国百年史』上巻
(山東画報出版社、一九九四年)